

弱視児童生徒の拡大教科書活用に関する教師の意識調査について (2009年12月24日版)

中野 泰志 (慶應義塾大学)

1. はじめに

本報告は、特別支援学校（視覚障害）（以下、盲学校）の高等部の生徒を対象に実施した拡大教科書の在り方に関する調査の中間報告です。全国調査であり、調査項目も多く、調査期間が短かったため、現時点ではデータ収集・チェック作業のすべてが終わっているわけではありません。そのため目安としてお考えいただきたいと思います。なお、本中間報告は、2009年12月23日現在の集計結果をまとめた資料です。

2. 目的

本研究の目的は、高等学校段階における弱視生徒用拡大教科書の在り方を明らかにするための基礎データを収集することである。拡大教科書の在り方を考える場合、ユーザは弱視生徒だけでなく、拡大教科書を授業において活用し、指導する教員の意識も重要な要素である。そこで、本研究では、全国の盲学校の教員を対象に意識調査を実施した。

3. 方法

盲学校で弱視児童生徒の教科指導に直接にかかわっているすべての教諭（理療科担当教諭は除く）を対象に拡大教科書に関する意識調査を郵送方式のアンケートで実施した。アンケートを送付したのは、全国の盲学校68校であった。

4. 弱視児童生徒の拡大教科書活用に関する教師の意識調査の結果概要

4. 1 回収率：2009年12月23日現在、65校（回収率：95.6%）から1,274件の回答が得られた。以下、主な分析結果を学部別に示す。

4. 2 回答者のプロフィール

(1) 学部：所属学部は、小学部が366人、中学部が363人、高等部が537人、その他が24人であった。

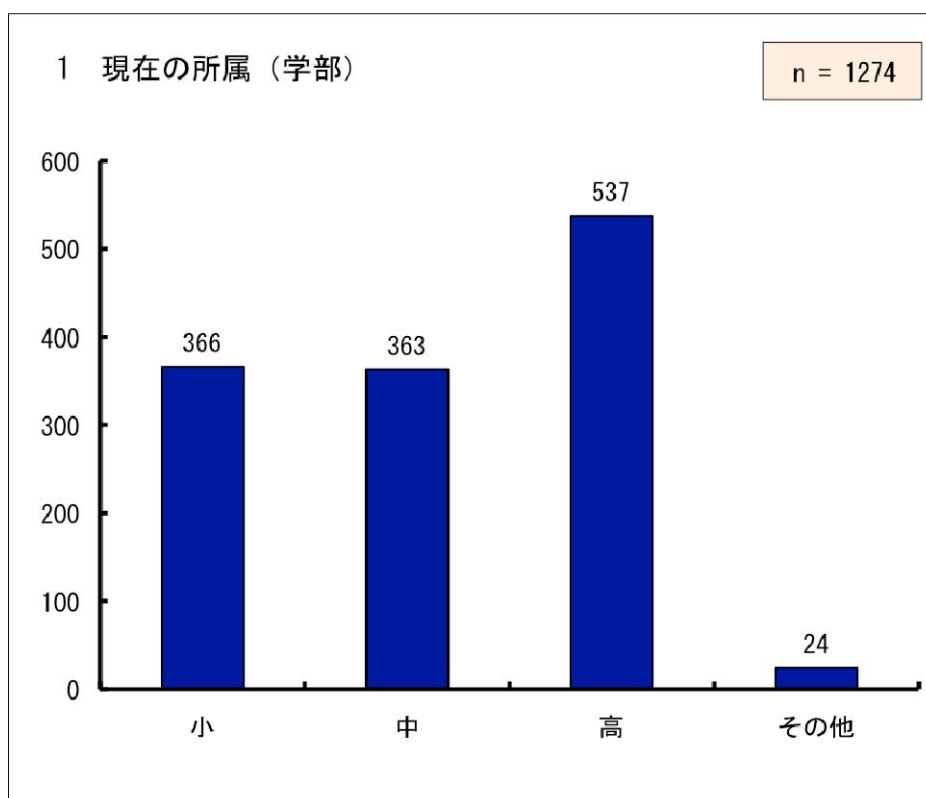


図1 現在の所属 (学部)

(2) 教職経験：以下に、教職経験、盲学校、弱視学級での指導経験を学部別に示す。教職経験は20～30年が475人、10～20年が286人で多く、比較的教育経験が豊富なケースが多いことがわかった。しかし、盲学校や弱視学級での視覚障害教育の経験年数は少なく5年未満というケースが多かった。

表1 教職経験

教職経験	小学部	中学部	高等部	その他	計
5年未満	45	54	56	1	156
5～10年	39	38	46	4	127
10～20年	88	75	116	7	286
20～30年	129	145	198	3	475
30年以上	54	41	88	6	189

表2 盲学校での指導経験

盲学校経験	小学部	中学部	高等部	その他	計
5年未満	150	167	229	5	551
5～10年	100	104	153	6	363
10～20年	73	52	79	7	211
20～30年	20	11	29	3	63
30年以上	3	5	8	0	16

表3 弱視学級での指導経験

弱視学級経験	小学部	中学部	高等部	その他	計
5年未満	44	34	60	6	144
5～10年	4	2	4	0	10
10～20年	1	1	3	0	5
20～30年	0	0	0	0	0
30年以上	0	0	0	0	0

(3) 盲学校（特別支援学校（視覚障害））教員免許状：盲学校教員免許を有している教員が560人であったのに対して、免許を有していない教員は703人であった。

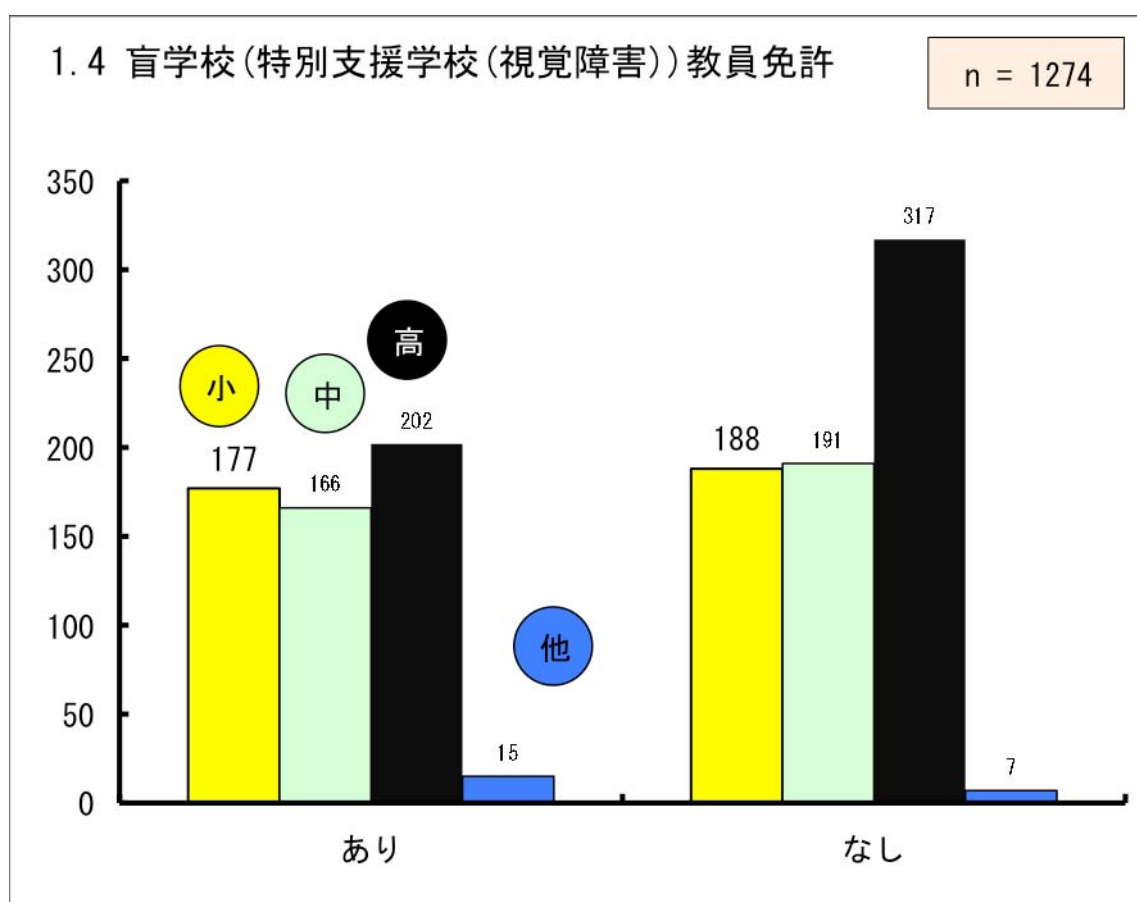


図2 盲学校（特別支援学校（視覚障害））教員免許状

(3) 視覚障害の有無：盲が14人、弱視が38名で、残りの1214人は視覚に障害のない教員であった。

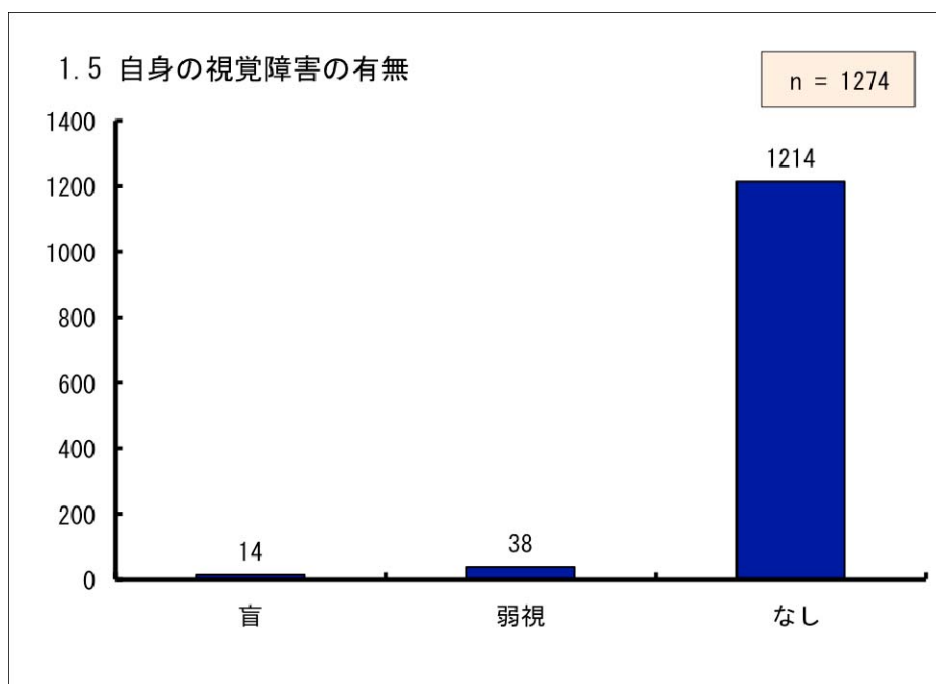


図3 自身の視覚障害の有無

4. 3 教科指導で拡大教科書を使用した経験等

(1) 拡大教科書を使った教科指導の経験（高等部においては、本年度途中で文部科学省から送付した単純拡大教科書も含む）：拡大教科書を使って教科指導を行った経験のある教員が786人であったのに対して、指導経験のない教員が479人であった。

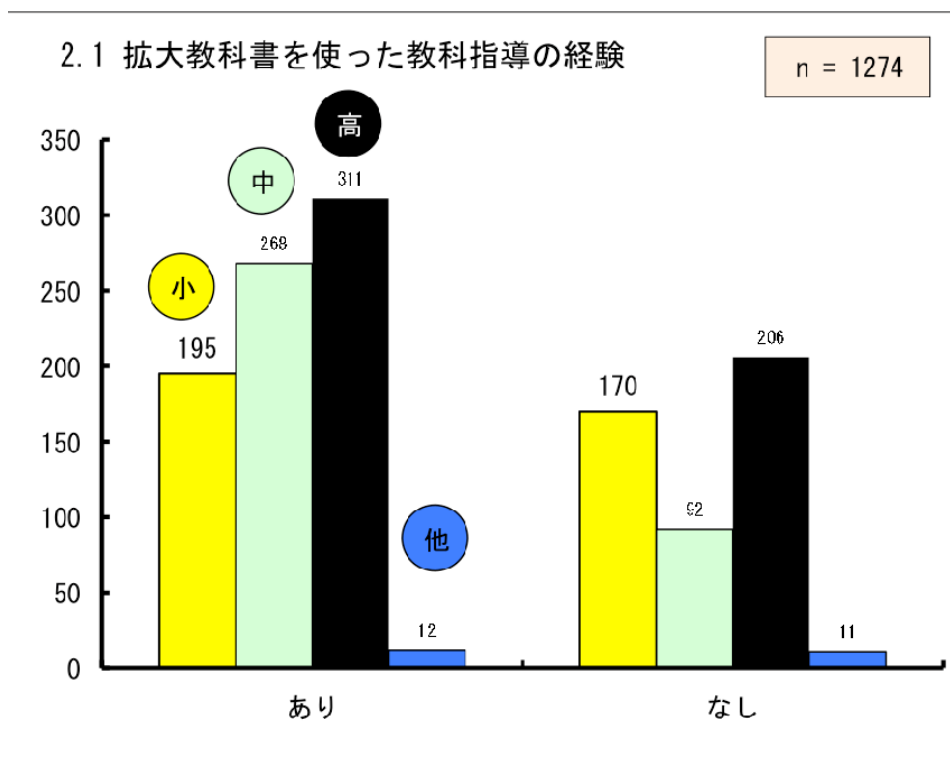


図4 拡大教科書を使った教科指導の経験

(2) これまでの指導で活用した拡大補助具：拡大読書器が 845 件と最も多く、ルーペ 782 件、単眼鏡 631 件、P C474 件であった。

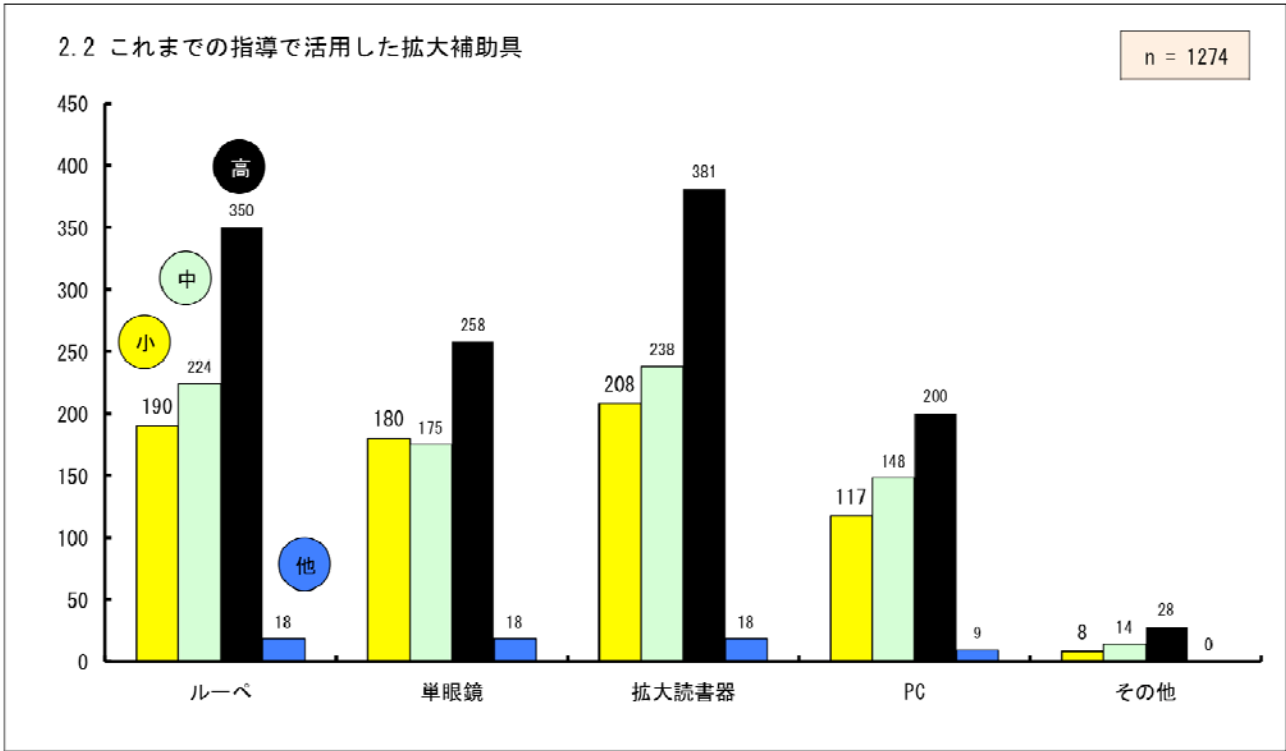


図5 これまでの指導で活用した拡大補助具

(3) 拡大教科書や補助具等を決める際に実施している評価：視力が 844 件と最も多く、視野 637 件、最大視認力 507 件で、国際的な読書評価チャートである MNREAD を活用しているケースは 219 件と多くなかった。

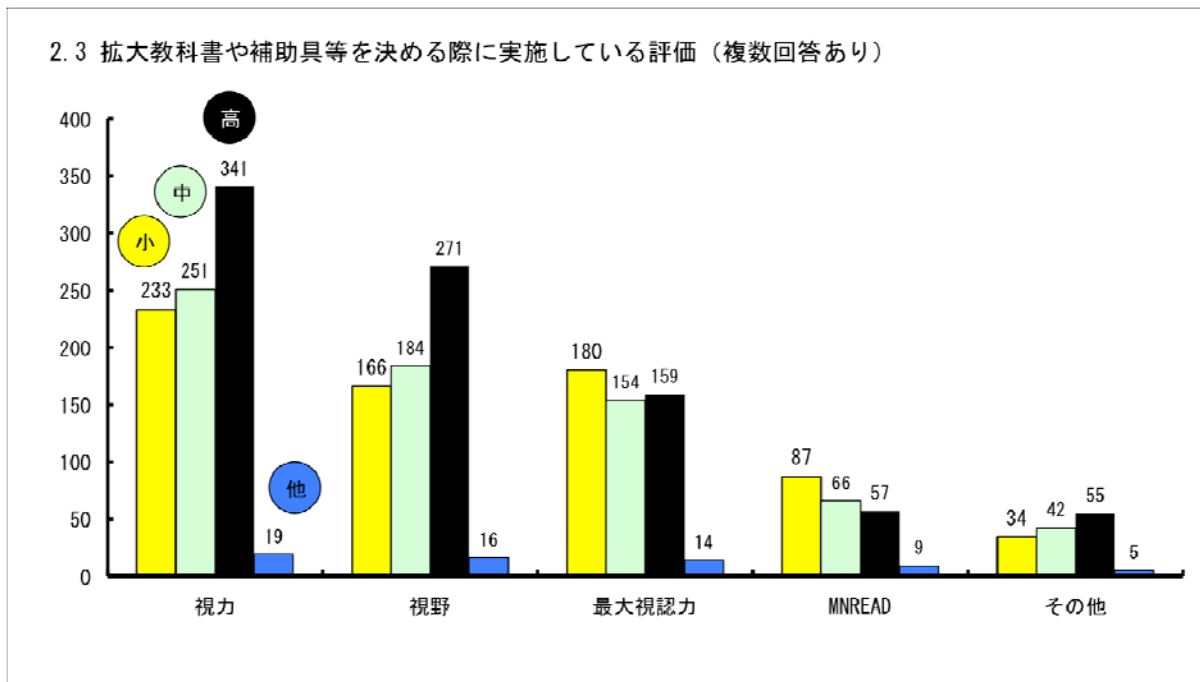


図6 拡大教科書や補助具等を決める際に実施している評価

1. 4 拡大教科書についての意識等（通常の教科書では十分な読書速度が得られない児童生徒に教科指導をすることを想定した回答）

(1) すべての教科・学年の拡大教科書が出版されるべきだと思いますか？：すべての教科・学年で拡大教科書が必要だとする回答は 677 件と最も多かったが、教員全体の半数程度（53.1%）に留まっていた。残りの 543 件の内訳は、「教科学年によっては必要」が 381 件、「補助具等があれば拡大教科書は必要ない」が 64 件、「その他」が 89 件であった。なお、その他では、生徒の実態に合わせて選択すべきだという意見が多かった。

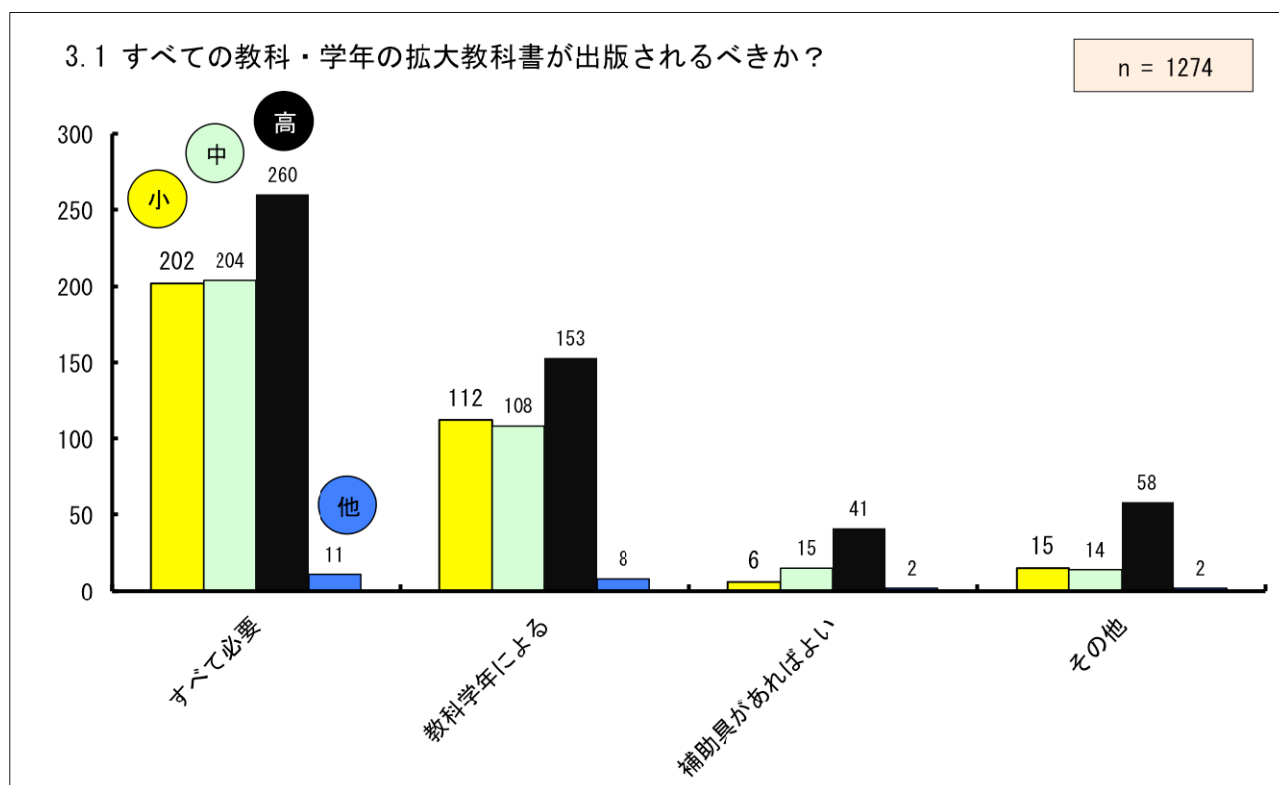


図7 すべての教科・学年の拡大教科書が出版されるべきか？

(2) 拡大教科書の必要性や文字サイズ等を決定する際に重視する基準（2つのみ選択）：拡大教科書が必要かどうかを判断したり、拡大教科書の文字サイズ等を決定したりする際に重視する要因としては、「視力や視野」が 773 件と最も多く、「読書効率」が 557 件、「最小可読文字」が 393 件、「児童生徒の要望」が 383 件、「学年や年齢」が 125 件、「視距離」が 62 件であった。実際に実施している評価では読書効率を測定しているケースは少なかったが、重要な要因として認識されていることがわかった。

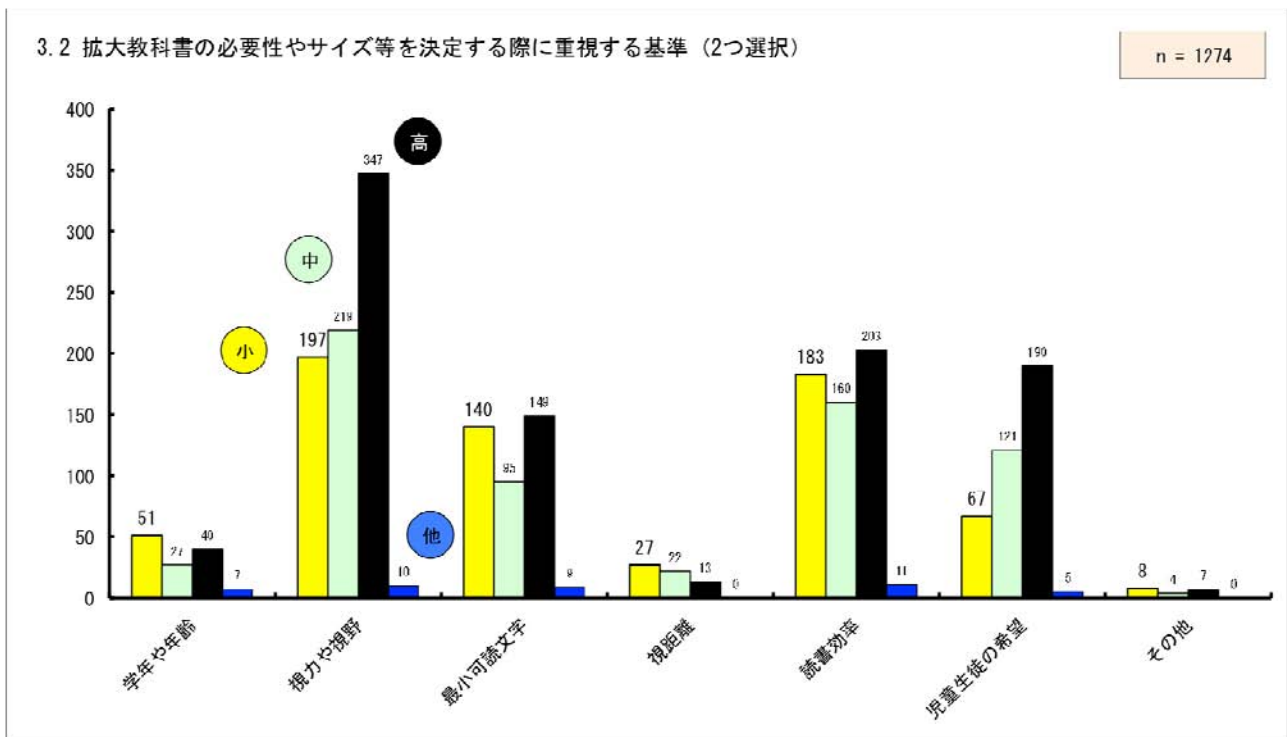


図8 拡大教科書の必要性や文字サイズ等を決定する際に重視する基準

(3) 拡大教科書の質として最も求められるもの (2つのみ選択) : 拡大教科書の質として最も求められる要因は、「文字の大きさや見やすさ」が1019件と多く、続いて「わかりやすく変更したレイアウト」が868件、「持ち運びやすさ」が181件、「原本と同じレイアウト」が115件であった。

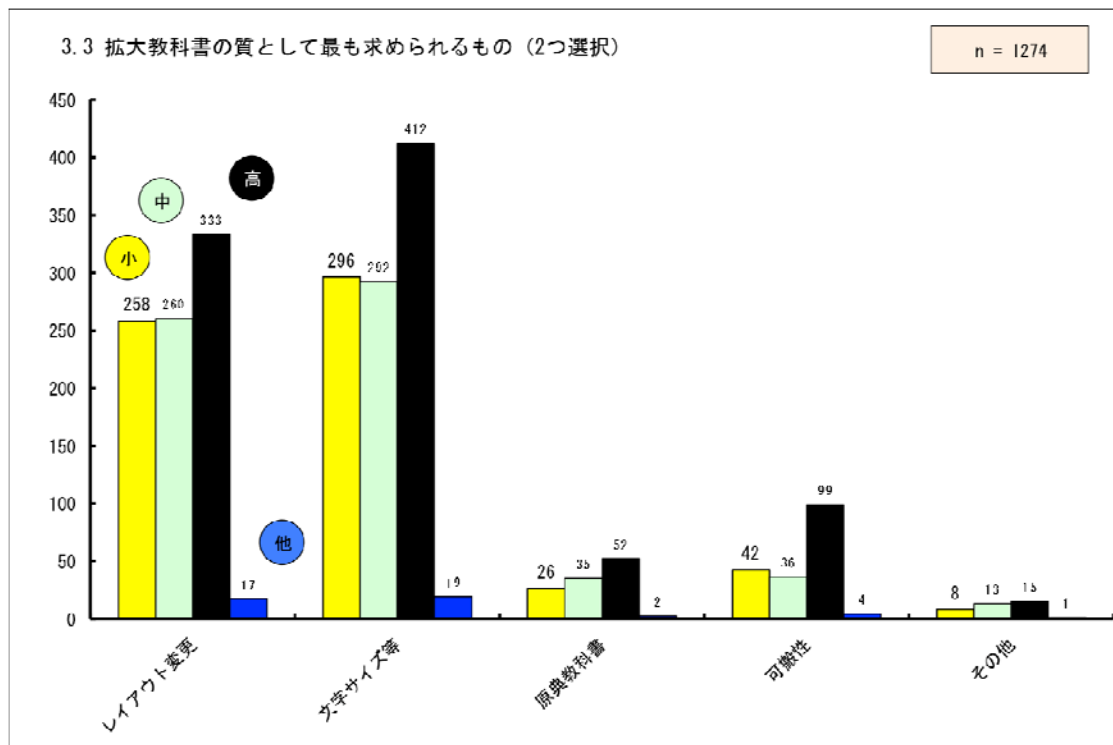


図9 拡大教科書の質として最も求められるもの

(4) 拡大教科書としてあらかじめ用意しておくべき文字サイズ・版サイズ（複数回答可）：
「26ポイントA4」が515件、「22ポイントB5」が469件と多かったが、「18ポイントA5」
が238件、「14ポイントA4」が212件と比較的ばらついていて、なお、複数選択が可能で
あったにもかかわらず、1つだけしか選択しなかったケースが660件、2つが347件、3
つが48件、4つが22件、5つが5件で、複数の文字サイズ・版サイズを要求する意見は
多くないことがわかった。生徒対象に行ったニーズ調査と比較すると教員の方が大きな文
字サイズ・版サイズが必要だと判断していることがわかる。

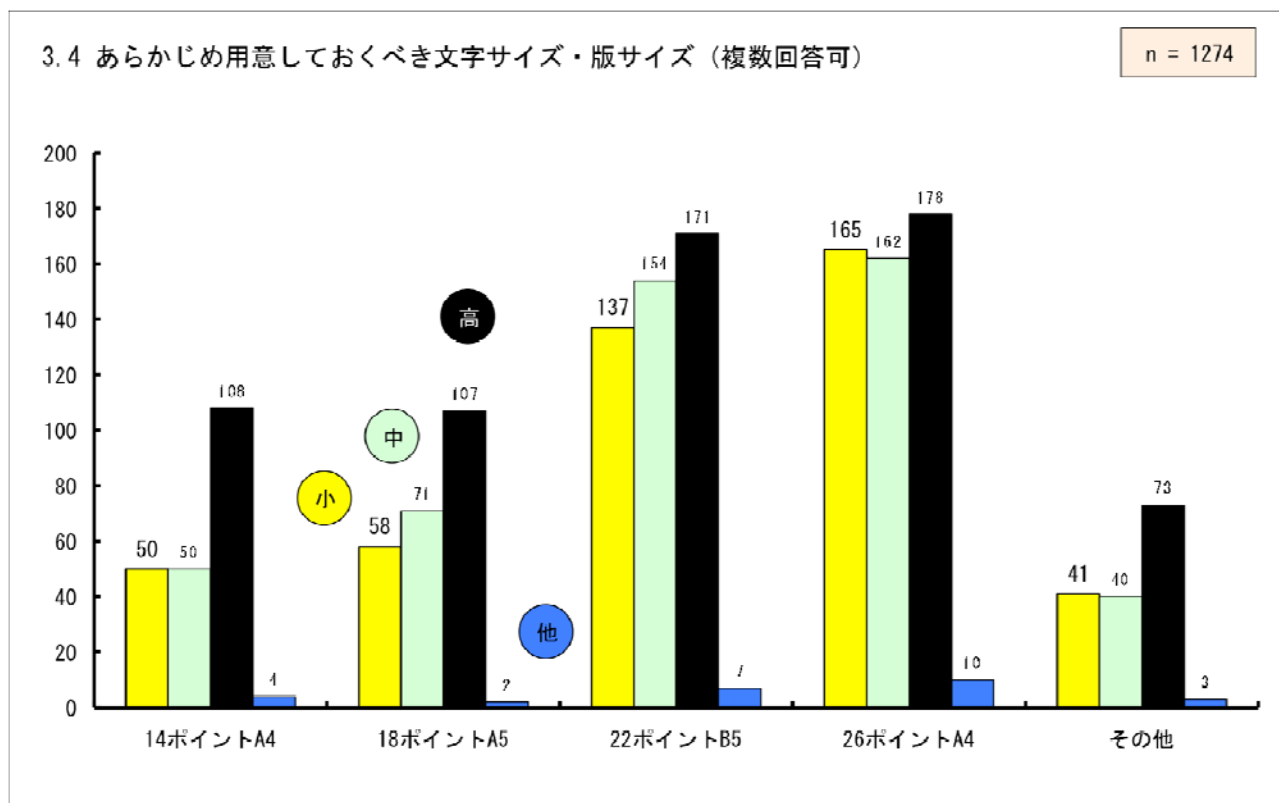


図10 拡大教科書としてあらかじめ用意しておくべき文字サイズ・版サイズ

(5) 拡大教科書にはゴシック体の文字が用いられていますが、適切だと思いますか？：ゴ
シック体がよいと回答したケースが848件と最も多く、「ゴシック体は適切だと思わない」
が152件、「どちらでもよい」が150件であった。ゴシック体は適切だと思わないと回答し
たケースでは、文字の形を覚える際には、太い教科書体が適切だとする意見が多かった。

3.5 拡大教科書に用いられているゴシック体は適切か？

n = 1274

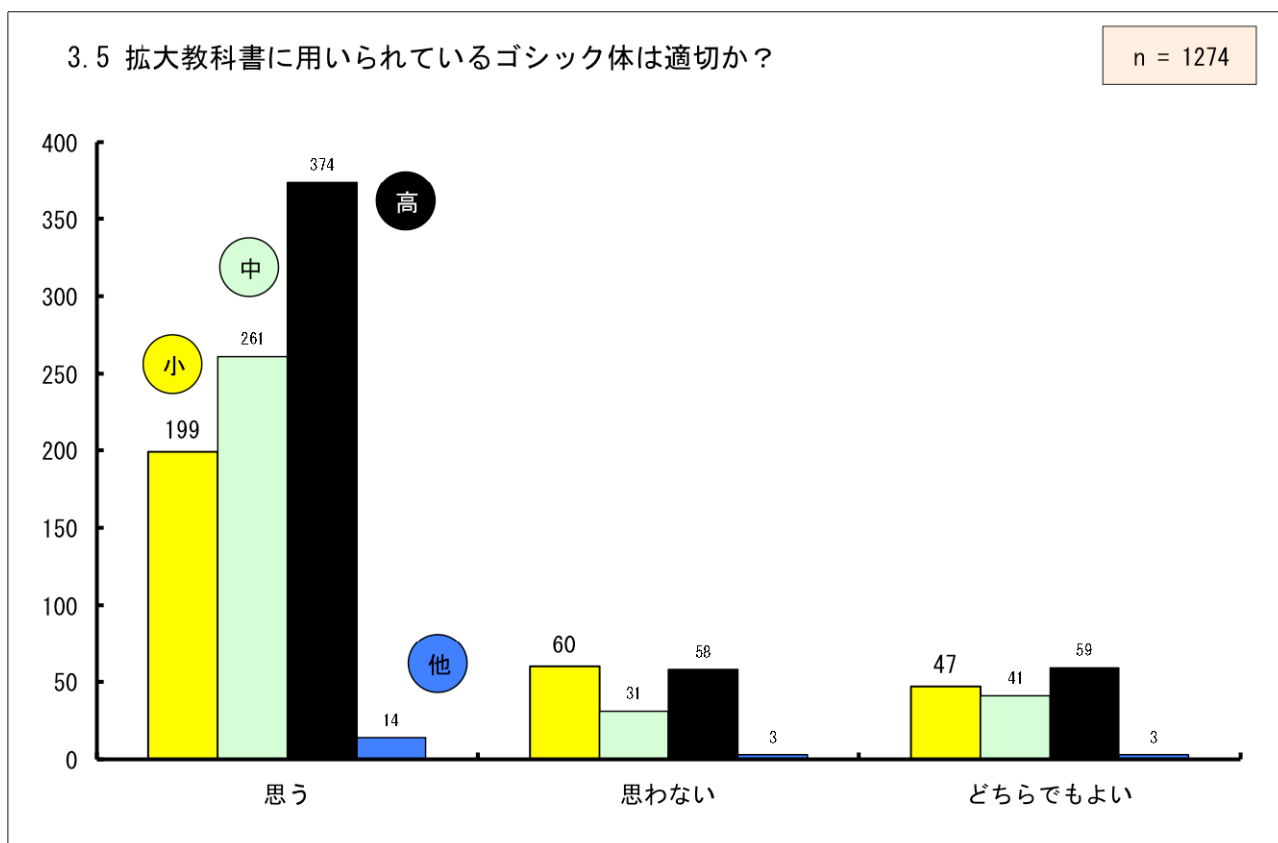


図 1 1 拡大教科書に用いられているゴシック体は適切か？

(6) 拡大教科書と視覚補助具との使い分けについて（1つのみ選択）：「低年齢のときには拡大教科書を使い、徐々に補助具に切り替えたほうが良い」という回答が 596 件と最も多く、「その他」が 228 件、「年齢や発達段階にかかわらず拡大教科書を使ったほうが良い」が 165 件、「年齢や発達段階にかかわらず視覚補助具を活用したほうが良い」が 100 件であった。「その他」には、学年や児童生徒の実態に応じて、使い分けをすべきだという提案が多かった。

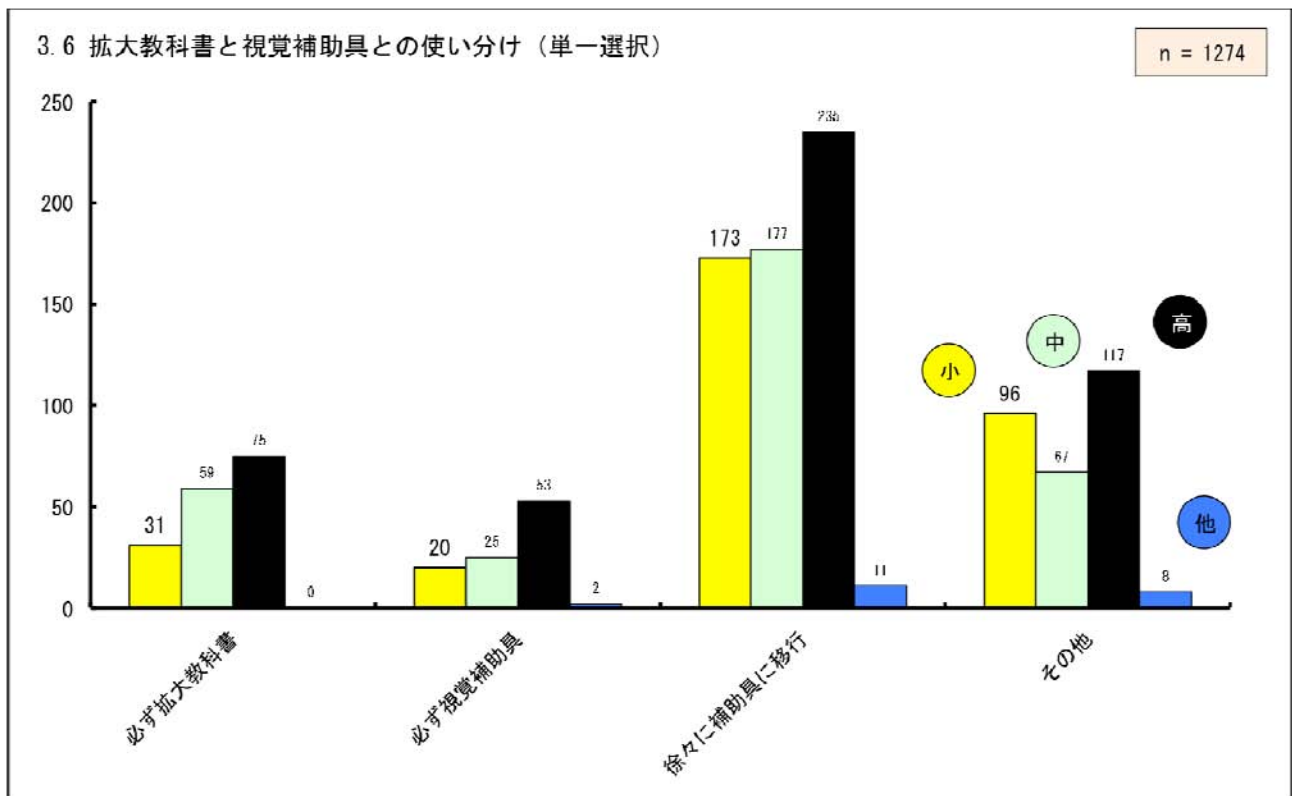


図 1 2 拡大教科書と視覚補助具との使い分けについて